指名コンペティションの結果について

第 20 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、7 名の候補者に参加を依頼したところ、うち 5 名からご提案をいただき、最終選考の結果、金野千恵氏がキュレーターに選出されました。

氏名	展覧会テーマ
秋吉 浩気（VUILD 株式会社 代表取締役 CEO）	Co-build for the Departed: Connecting Independent Network
草野 絵美（株式会社 Fictionera 代表取締役・アーティスト）	PULSING NURSERY – 生成の場としての建築と、これからの時代のホスピタリティ
金野 千恵（teco 代表取締役、京都工芸繊維大学デザイン科学域 特任准教授）	MONSOON COMMONALITY
篠原 雅武（京都大学 大学院総合生存学館 特定准教授）	不気味な場所の生活： life in the face of the uncanniness of place
馬場 正尊（株式会社オープン・エー 代表取締役）	Dialogue / Sensoring　建築と人間の対話

（候補者氏名五十音順、敬称略）

選考委員会の講評は次頁のとおりです。

選考委員会（五十音順、敬称略）

委員長：　篠原　聡子（日本女子大学学長、空間研究所代表）
委員：　青木　淳（建築家、AS Co. Ltd.代表）
太田　佳代子（建築キュレーター、編集者）
小野田　泰明（東北大学教授、日本建築学会会長）
門脇　耕三（明治大学教授、アソシエイツ株式会社パートナー）
宮城　俊作（PLACEMEDIA パートナー、前東京大学教授）

講評

今回の建築展の審査会は、全５提案のプレゼンテーションを通して、「建築」の意味が多方向に拡張された感があった、というのがまずは率直な感想である。そのこと自体は、建築展の非常に魅力的な展開を予感させるものであった。その上で、ヴェネチア・ビエンナーレで、今、日本館から発信する意味、が繰り返し議論された。また、ヴェネチア・ビエンナーレの会期が半年にも及び、多様な来場者、見学者が想定される近年では、伝わりやすさ、分かりやすさも同時に重要であるとの意見も多かった。

中でも、最も従来の提案と一線を画していたのは、草野絵美さんの「PULSING NURSERY」であり、建築家も建築作品も含まないアート作品による建築空間の提案であった。「創造後に起こることを問う建築的提案」とし、アート作品同士のインタラクションに加えて、アートと鑑賞者の間に生成されるものに重きが置かれ、最終的には建築空間は観客の想像力のナーサリーとして意味をもつという方向性には未知な体験をさせる展示として大きな可能性が感じられた。一方で、吉阪建築のスラブを穿った穴を貫く菩提樹的な母体樹は、周辺の情報を収集してインキュベートして外界へ送り出すという生成の装置としてこの展示で大きな意味を持つものの、その存在の大きさが、創造後に起こるインタラクションを圧倒してしまうようにも見え、また、非常に象徴的な姿が予想を超えた意味を持ってしまうのではないかとの懸念も呈された。

秋吉浩気さんの案「Co-build for the Departed」は、能登の震災古材を使ってベネチアに「死者のための空間」をつくり、会期後は能登の里山に戻す、という提案であったが、この内容以上に、制作、仕様に関わるプログラムが独創的であった。できるだけ多くの人々を巻き込む仕掛けとしてオープンコールで国際コンペをする、ネットワークによる加工、現地の人を中心にコビルド、各国が開催する祈りのワークショップ、そして、能登にそれを戻してコビルド、とのプロセスのデザインは、ヴェネチア・ビエンナーレでの建築展をその場にとどまらない企画にしている。その評価とは裏腹に、開催までの時間的な制約、プロセスが分断されることで作られるものの質ついても懸念があげられた。また、各国の祈りのワークショップという提案については、「祈り」は宗教と無縁には存在せず、それぞれの国の文化的な背景を考慮すると更なる配慮が必要であろうという意見もあった。そうした様々な懸念を踏まえても、あるいはその先の見えなさゆえに魅力的な提案であったとも言えよう。

篠原雅武さんの「不気味な場所の生活」は、哲学者からのプロポーザルらしく、タイトルからして通常ならざるものを感じさせた。哲学者ティモシーモートンの思想に触れつつ、水・空気・土壌といったエレメンタルなものが汚染された状況と共存せざるを得ない世界を考察し、日本館を危機的状況における「住まい」として再定義する展示の提案であった。建築家とアーティストのコラボレーションによる、ファイナルホームとしての日本館という展示は確実にインパクトをもつであろうと予測され、「不気味さ」はディストピア的な世界に繋がりやすいが、この企画の裏側にはしたたかな適応性も見えるとの評価もあった。一方で、リアルなファイナルホームが、環境に影響を与えるものとしての人間、環境の一部としての人間という深い思考にまで観客を導くであろうかとの懸念も示された。その意味では、「原発」の問題のような具体的な脅威が明示されずとも、透けて見えるような構成もあり得たのではないかとの意見もあった。

馬場正尊さんの「Dialogue / Sensoring　建築と人間の対話」において、近代建築は、暑さ、匂い、音、眩しさなど、視覚以外の感覚を削ぎ落とす方向に発展したという認識のもと、視覚以外の感覚を通して人間と建築が対話できる時代が到来しつつある、というのがこの提案の最も重要なステートメントである。この思考は人間を積極的に環境の一部と捉えるものであり、新たな建築、環境の捉え方として評価できる。展示においては、人が空間に入ることで、そこに留まったミストが動き、生が入ることで環境が揺らぐ様子を可視化し、それがまた人間の感受性を刺激する装置となる、という説明に対して、近代建築が捨ててきたものをあえて見せる展示であり、ある種のシニカルさやアイロニーも含まれるのでは、という意見もあった。この日本館そのものが樹木に囲まれた自然の中にあり、その立地を配慮すると、二階に造ろうとしている展示が視覚的には擬似的な自然をつくったように見えてしまう可能性もあり、限定された空間で自然現象を凝縮して表現することの限界が際立ってしまうのではないかという懸念も呈された。

金野千恵さんの「MONSOON COMMONALITY」は、建築を通して人間が生きる上での共同性をどう議論できるかという問いを立て、「モンスーンコモナリティ」と題して、モンスーンという気候を共有する地域の人々が、その気候ゆえにもつ文化や建築空間の独自性、自然災害への集団回復力を共有しうることの可能性を示した。それに基づき、モンスーン地域で活動する 3 名の建築家が共同で展示設計に臨み、自然と共生しようとするアジア的な知恵を提示する建築的提案を行うという。ヴェネチア・ビエンナーレを契機として、気候変動というグローバルな危機を共有する建築家たちが、日本館のイニシアチブで地域内の異なる都市の建築家と協働し、オルタナティブな建築のありかたを探り、提示するという枠組みは新しく、大きな吸引力をもつであろうとして、評価された。また、気候変動に着目するのであれば、直近 10 年などのデータに基づき、さらに未来への提言にも繋げて欲しいという要望が出された。

以上 5 名のキュレーター候補者によるプレゼンテーション後、選考委員 6 名による選考がなされた結果、金野千恵氏を第一候補者、草野絵美氏を次点として日本館展示キュレーターに推薦するに到った。

（五十音順、敬称略）

推薦委員

饗庭　伸
家成俊勝
五十嵐太郎
石川　初
宇野常寛
ケン・タダシ・オオシマ
大西麻貴
貝島桃代
吉良森子
倉方俊輔
佐藤　淳
ブノワ・ジャケ
謝宗哲
高村雅彦
トーマス・ダニエル
ピッポ・チョッラ
中村拓志
西沢立衛
西牧厚子
羽藤英二
エルウィン・ヴィライ
平田晃久
平塚　桂
アズビー・ブラウン
保坂健二朗
前田尚武
三宅理一
山名善之
吉見俊哉